

〈資料紹介〉

図書館貴重コレクション「北島亘寄贈書」 — ユニテリアン研究・ロータリークラブ研究のために —

小 田 真 裕

はじめに

公益財団法人大倉精神文化研究所附属図書館は、精神文化に関する専門図書館として、他の図書館や資料保存機関では見ることができない、あるいは国内に数点しか現存していない書籍を多く収蔵している。それらの書籍を含む図書館の貴重コレクションは、昭和7年（1932）の開館以来、各地の研究者や一般の方々の閲覧に供してきた。そして、平成25年（2013）11月にインターネットでの蔵書検索を開始してからは、遠方からの問い合わせも一層増えている。貴重コレクションの概要は、図書館のウェブサイトおよび『大倉山論集』第61輯に掲載しているので参照してほしい。⁽¹⁾

さて、当図書館の蔵書約10万冊の中には、約1万冊の洋書が含まれている。これらの洋書は、書籍の内容だけでなく、当図書館に収蔵されるまでの来歴も興味深いものが多い。例えば、大倉邦彦および原田三千夫が大正15年（1926）3月から昭和2年（1927）1月までの間にヨーロッパで購入した8,000冊余りの洋書、ラビンドラナート・タゴールが大倉邦彦に寄贈した自著159冊などである。

本稿で紹介する「北島 亘 ^{きたしまわたり}寄贈書」も、興味深い来歴を持つコレクションである。「北島亘寄贈書」は、昭和7年（1932）10月25日付で当研究所の蔵書として登録された書籍70冊から構成され、その内訳は洋書61冊・和

書9冊である。⁽²⁾

「北島亘寄贈書」については、これまで不明な点が多かった。当研究所でも、平成27年(2015)3月に発行した『大倉山論集』第61輯では、「ユニテリアン・ミッションの教師、日本銀行員を経て、大正期以降は東京株式取引所取引員になった人物と推測されます」「北島が神学校時代に使用した書籍群であることがうかがえます」と記しているように、寄贈者の特定には至っていなかった。⁽³⁾しかし、調査の進展により、様々なことがわかってきた。

調査成果の中でも特筆されるのが、書籍に書かれた北島宛のメッセージや北島自身による書き込みの発見である。本稿で述べるように、これらの内容の分析から、寄贈者についての従来の推測が正しかったこと、そして、「北島亘寄贈書」が、従来の推測通りの「北島が神学校時代に使用した書籍群」に加え、北島が帰国後に入手した書籍も含む書籍群であることが明らかになった。今後、書籍の内容や関連資料の分析を進めていけば、彼の人物像、そして、彼が関係したユニテリアン(ユニテリアン主義)⁽⁴⁾やロータリークラブについても、興味深い情報を得られるだろう。

本稿では、北島亘および「北島亘寄贈書」に関する、現時点での調査成果を報告する。そのことで、今後の閲覧・研究利用の一助となる情報を提供したい。

一 北島亘

^{きたしまわた}り
北島亘(1868年～1949年)は、日本人で初めてアメリカで牧師となったユニテリアンで、帰国後、1920年代に東京ロータリークラブの幹事を務め、同クラブの英文週報(*Bulletin*)を編集した人物である。北島の経歴は、これまでもキリスト教史・英語教育史・経済史、あるいはロータリークラブに関する文献の中で言及されてきた。しかし、各執筆者の関心が及ぶ範囲での断片的な紹介に止まり、先行研究の間で齟齬も見られる。そこで、

表1 北島亘略年譜

和暦	西暦	出来事	典拠
明治元	1868	生まれる。	【北島】
明治10	1877	この頃までに、京都府に移る。	【北島】
明治16	1883	この頃、アメリカに渡る。	【北島】
この間		ミードヴィル神学校とハーヴァード大学の神学校を卒業する。	【北島】 【土屋】
明治27	1894	ニュージャージー州ヴァインランドの教会で牧師として活動する。	【北島】
明治29	1896	日本に帰国する。	【北島】
この頃		先進学院で教師を務める。	【土屋】
明治30	1897	9月から国民英学会で会話専修課の講師となり、のち、日本銀行に勤める。日本銀行では、文書課で英文を取り扱い、ニューヨーク駐在も経験する。	【磯邊】 【土屋】
明治32	1899	3月発行の『基督教名鑑』（教文社）に、銀行員・ユニテリアンとして名前が載る。	
明治37	1904	妻リリアンとの共著 <i>Select Anecdotes for Conversation and Composition</i> を三省堂から出版する。	
明治38	1905	来日したエドワード・ヘンリー・ハリマンの接伴委員を務める。	【田畑】 【北島】
明治39	1906	来日したジェイコブ・シフの行程に同行する。	【田畑】
この間		合資会社福島商會に入社する。福島商會では横浜支店長を務め、のち、本店勤務となる。	【山叶】
大正5	1916	2月19日、東京株式取引所の仲買人（名義人）となる。12月、株価暴落に対処するための評定委員の一人となる。	【山叶】 【東柳】
大正7	1918	3月、福島商會の株式会社山叶商會への改組に伴い、山叶商會の取締役となる。	【山叶】
この頃		日本橋区株式仲買業者として、東京都の多額納税者に名を連ねる。	【東柳】 【土屋】
大正9	1920	10月、東京ロータリークラブの創立会員に名を連ねる。	【東口】
大正10	1921	4月9日、東京株式取引所の仲買人（名義人）を辞める。6月21日、山叶商會取締役を退任する。	【山叶】
大正11	1922	6月30日から1期、東京株式取引所の一般取引員組合委員を務める。	【東柳】
大正12	1923	この年、東京ロータリークラブの幹事を務める。この年からクラブ解散まで、英文週報（ <i>Bulletin</i> ）を編集・発行する。	【東口】
大正14	1925	この年から昭和3年（1928）まで東京ロータリークラブの幹事を務める。5月から東京ロータリークラブの会報を編集・発行する。	【内田】 【東口】 【田中】
昭和2	1927	著書 <i>Japan</i> を東京ロータリークラブから出版する。	
昭和11	1936	8月発行の『国際ロータリー第七十区クラブ会員名簿』に、東京日本橋の望月商店に所属する「株式仲買」として名前が載る。同年から「英文歴史」の編集を始める。	【東口】
昭和16	1941	「英文歴史」を完成させる。	【東口】
昭和22	1947	80歳に達したことを理由として水曜クラブ退会を申し出るが、懇請されて特別会員となる。	【東口】
昭和24	1949	1月19日、没。	【北島】

典拠の略称は次の文献を示す。【磯邊】磯邊弥一郎『国民英学会創立第三十周年回想録』（国民英学会出版局、1918年）、【浦】浦和男「明治後期における西洋笑話と英語学習書」（『文学部紀要』第22-2号、文教大学、2009年）、【北島】北島メリー・エミ「父 北島亘とロータリー」（『ロータリーの友』第11巻第4号、1963年）、【田畑】田畑則重「日露戦争に投資した男」（新潮社『新潮新書』、2006年）、【土屋】土屋博政「講演 日本のユニテリアンの盛衰の歴史を語る（於：2005年4月1日同志社大学人文科学研究所）」（『慶應義塾大学日記紀要 英語英米文学』47、2005年）、【東口】東京ロータリークラブ ロータリー五十周年記念委員会編『わがクラブの歴史』（東京ロータリー倶楽部、1955年）、【山叶】新日本証券総務部社史班編『山叶証券史』（新日本証券、1979年）。

先行研究の記述を吟味しつつ、各種の資料を検討し、渡米以降の経歴をまとめていこう。なお、北島の略歴を表1にまとめたので、適宜参照してほしい。

明治元年(1868)に生まれた北島は、明治16年(1883)頃、アメリカへ渡る。アメリカでの北島について言及した文献は僅かだが、『ロータリーの友』第11巻第4号に掲載された北島亘の娘である北島メリー・北島エミによる「父 北島亘とロータリー」と同号所収の「北島亘氏略歴」を併せると、「はじめはハウスボーイとして働きながら学び」、「カリフォルニア州のオークランドハイスクール」と「ミドヴィルのアレガニカレッヂ」を卒業し、「ハーバード大学でドクターの称号をと」り、「1896年に帰朝」したということになる。⁽⁵⁾一方、日本のユニテリアンについて研究を進めている土屋博政氏の講演録には、「ミードヴィル神学校」卒業後に、「ハーヴァードの神学校を経て、アレゲニイ大学で哲学博士号を取得」し、「1893年に帰国」したと記されており、両者の記述は一致していない。また、⁽⁶⁾ニューヨークの投資銀行クーン・ローブ商会の首席代表ジェイコブ・シフは、明治39年(1906)の来日時の日記に、北島と初めて会った時の印象について、「北島氏は年のころ三五歳くらいで、ハーバードを卒業し、長くアメリカに住み、アメリカ人と結婚したという。われわれは、それですっかり安心し、第一歩から気が楽になった」と記している(原文は英文)。⁽⁷⁾

北島がアメリカで学んだ学校と期間の詳細は不明だが、大倉精神文化研究所附属図書館収蔵の「北島亘寄贈書」には、“Meadville Theological School” および “Theological School in Harvard University” のシールが貼られた書籍があるので、ミードヴィル神学校とハーヴァード大学の神学校で学んだことは確かだろう。いずれもユニテリアン主義の影響が強い神学校という点は、注目されよう。

アメリカでの北島については、ユニテリアンに関する行動や経歴が知られている。土屋博政氏は、北島が1889年6月11日付の書簡において、アメ

リカのユニテリアン協会本部に対し、日本へ派遣する宣教師には、アーサー・メイ・ナップよりも保守的な人物を選ぶべきだと伝えたことを紹介している。また、先述した『ロータリーの友』第11巻第4号所収の「北島亘氏略歴」⁽⁸⁾には、「シャーレの教会で一年間説教をつづけて後ニュージャージーのヴァインランドのユニテリアン教会で1894年に牧師となった」と記されている。北島が帰国後に講師を務める国民英学会の創立者磯邊弥一郎も、北島が「米国に於てユニテリアンの牧師として一教会を監牧し」ていたと述べており、後述するように「北島亘寄贈書」の書籍には、1895年2月時点で北島がヴァインランドに居たことを示す書き込みがある。「北島亘氏略歴」には典拠が示されていないが、北島は、神学校で学んだ後に、ニュージャージー州で牧師として活動したと考えられる。日本への帰国の時期は、「1893年」ではなく明治29年（1896）頃ではないだろうか。⁽¹¹⁾

帰国後の北島は、東京市芝区三田四国町（現東京都港区）にあったユニテリアンの神学校である先進学院の教師となるが短期間で辞め、明治30年（1897）に、東京市神田区錦町（現東京都千代田区）にあった国民英学会⁽¹²⁾に新設された会話専修科の講師となる。⁽¹³⁾そして、国民英学会を辞した後、日本銀行に勤める。日本銀行での北島は、文書課で英文を取り扱い、ニューヨーク駐在も経験したという。⁽¹⁴⁾また、明治38年（1905）に来日した実業家エドワード・ヘンリー・ハリマンの接伴委員を務め、翌明治39年（1906）に来日したクーン・ローブ商会の銀行家ジェイコブ・シフの滞日中、⁽¹⁵⁾全行程に同行している。シフは、日本に着いた3月25日の日記に、高橋是清の私設秘書深井英五から北島について、「日本銀行から派遣され、日本滞在中すべての行程に同行して便宜をはかり、何ごととも計画どおりになるよう手配してくれる」との説明を受けたと記している。⁽¹⁶⁾

ところで、北島の妻リリアンも国民英学会の講師を務めている。磯邊弥一郎『国民英学会創立第三十周年回想録』によると、同書が出版された大正7年（1918）時点には、「主として会話専修科を担当」しており、生徒

から「国民のマザー」と呼ばれるほど慕われたという⁽¹⁷⁾。結婚の時期は文献によって違いがあるが、明治37年（1904）に三省堂から出版された、リリアンの国民英学会での指導経験をもとにした日本人学生向けの英語学習書 *Select Anecdotes for Conversation and Composition* を見ると、扉部分にはリリアンと北島の名前が連名で記されており、奥付は「著者北島亘」となっている⁽¹⁸⁾。

さて、北島は、日銀でのニューヨーク駐在から帰国すると、合資会社福島（浪蔵）商会の横浜支店長となり、「外国商社との取引に敏腕をふるった」⁽¹⁹⁾そうである。そして、本店勤務となった後の大正5年（1916）2月から大正10年（1921）4月まで株式仲買人として定期取引に従事した。なお、この間の大正7年（1918）3月に福島商会は改組して株式会社山叶商会となり、北島は取締役役に就いている。

ところで、東京株式取引所では、明治36年上半年以降、「多額の売買を為したる取引員若干名」に記念品を贈呈しており、北島は、仲買人となつて間もない大正5年（1916）下半期に、二等になっている。大正5年は、12月に株価が暴落し、東京・大阪・名古屋の取引所が休会する事態となった年である。この事態への対応策の一つとして、15人の仲買人を評定委員として株価を決める措置が執られているが、北島は、評定委員の一人になっている⁽²⁰⁾。仲買人だった時期の北島は、記念品を毎期贈呈されており、大正6年上半年・同年下半年・大正8年下半年・大正9年上半年には一等となっている。仲買人を4月に辞めた大正10年上半年は十一等で、翌大正11年6月30日から1期、東京株式取引所の一般取引員組合委員を務めてい⁽²¹⁾る。『日本全国商工人名録』を見ていくと、大正8年（1919）発行の第7版まで「北島亘」という名前は見えないが、大正10年（1921）発行の第8版には載っている。同書からは、大正9年度の納税額が、東京市の株式仲買人で最大額の営業税25,470円ということがわかる⁽²²⁾。

なお、北島の所属は、時期や資料によって違いがある。大正9年4月28

日付の『中外商業新報』には「山叶商会」と記されているが、同年10月21日付の、日本で初めてのロータリークラブである東京ロータリークラブ創立時の名簿には「北島商会」の会主という肩書きで名を連ねている。そして、昭和11年（1936）8月付の『国際ロータリー第七十区クラブ会員名簿』では、「株式仲買」という点は変わらないが、所属は東京市日本橋区兜町の「望月商店」になっている。

さて、大正年間以降の北島は、ロータリアンとしても著名であった。既に言及したように、大正9年（1920）10月の東京ロータリークラブ創立時のメンバーに名を連ね、大正12年（1923）および大正14年～昭和3年（1925～1928）の期間には、同クラブの幹事を務めている。そして、東京ロータリークラブの週報を英文で編集・発行し、昭和11年～16年（1936～1941）にかけて、「英文歴史」(*History of the Rotary Club of Tokyo*)をまとめている。⁽²⁴⁾日本のロータリークラブは、昭和15年（1940）に国際ロータリーから脱退し、東京ロータリークラブは同年9月に解散する。しかし、東京ロータリークラブの会員は解散後も会合を続け、同年12月、新たな組織である水曜クラブを設立する。北島は、この水曜クラブに参加するが、昭和22年（1947）には、高齢を理由に退会を申し出る。しかし、他の会員たちから懇請され、水曜クラブの特別会員となる。そして、昭和24年（1949）1月19日に没している。

以上、現在までの調査成果に基づいて、北島の経歴をまとめた。先述したように、北島の経歴については不明な点が多い。今後、さらなる資料の渉猟・検討を行い、彼の行動をより詳細に解明していく必要がある。

二 「北島亘寄贈書」

それでは、「北島亘寄贈書」の内容を紹介しよう。なお、書籍の細目は、インターネット上でOPACによる蔵書検索が可能なので、参照してほしい。⁽²⁵⁾

まず、刊行された年代について、刊記を確認できたもので最も古い時期

に出版された書籍は、英領インドで活動したユニテリアンであるラーム・モーハン・ローイの著書 *The Precepts of Jesus, the Guide to Peace and Happiness* (請求記号エ-6-14) で1825年、最も新しいものは1927年(昭和2)の3冊で、フランク・ラム *Rotary: A Business Man's Interpretation* (エ-6-15)、高田早苗『半峰昔はなし』(エ-6-62)、土屋元作編集・発行の恩田空『日暮硯』(エ-6-68)である。全70冊の出版年の内訳は、洋書が、1825～1850年：7冊、1851～1900年：45冊、1901～1927年：3冊、不詳6冊である。そして、和書9冊は大正6年(1917)～昭和2年(1927)と、いずれも北島が帰国してから出版されている。

「北島亘寄贈書」は、全体としては、1870年代から1900年頃までのキリスト教やユニテリアン主義に関する洋書が多い。しかし、キリスト教やユニテリアン主義に関心がある方は勿論、これまでそうした分野に縁遠かった方も楽しめる書籍群である。

その理由を、具体的な書籍を例示して説明しよう。まず、ジョン・ヘンリー・バロウズ *The World's Parliament of Religions Volume I* (エ-6-16) を取り上げる。同書は、1893年に開催されたシカゴ万国宗教会議の記録で、議長を務めた著者バロウズは、長老派教会の牧師である。シカゴ万国宗教会議については、「最初からキリスト教的色彩が支配的」だったとする見解⁽²⁶⁾もあるが、キリスト教以外の代表者による演説も行われており、近年、近代仏教史の観点から同会議に着目する研究も増えている⁽²⁷⁾。注目すべきことに、会議に参加した仏教徒のうち中西牛郎と平井金三は、帰国後にユニテリアンとして活動している⁽²⁸⁾。また、北島が教鞭を執った先進学院は、日本ゆにてりあん協会が開校した東京自由神学校が前身だが、先進学院への改称頃には倫理学やキリスト教以外の宗教に関する講義も行われており、僧侶の学生も多かったという⁽²⁹⁾。

書籍への書き込みから、北島は *The World's Parliament of Religions Volume I* を1894年1月頃に読んでいたと推察されるが、同年の書き込み

がある書籍には、聖書に関する書籍だけでなく、*Lectures on the Origin and Growth of Religion as Illustrated by Some Points in the History of Indian Buddhism* (エ-6-50) のような仏教に関する書籍もある。仏教関係の書籍は、「北島亘旧蔵書」の和書に、仏教協会編『新訳仏教聖典』(エ-6-64) や姉崎正治『解説要本 法華經の行者日蓮』(エ-6-67) がある。ただし、北海道家庭学校の創始者として知られる社会福祉の実践家で、「基督教新聞」の編集者でもあった留岡幸助の著書『自然と児童の教養』(エ-6-61) もある。アメリカにいた時期、そして帰国後も、北島亘の思想を考えるためには、ユニテリアン主義以外の宗派・宗教を視野に入れる必要があるといえよう。

書籍への書き込みについて、より詳しく見ていこう。まず、先述のフランク・ラム *Rotary: A Business Man's Interpretation* (エ-6-15) を取り上げる。著者は、ワシントン州ホキアムのロータリークラブのチャーターメンバーの一人で、代表 (president) も務めた人物である。ロータリーの歴史や理念などについて説明している同書には、「42」というシリアルナンバーが付されており、“To Kitty In appreciation of pleasant days in Tokyo. Frank H Lamb Oct 5, 1928” という書き込みがある。“Kitty” とは、各国のロータリーアンから呼ばれていた北島のニックネームである。1928年10月5日は、10月1日から4日にかけて東京の帝国ホテルで開催

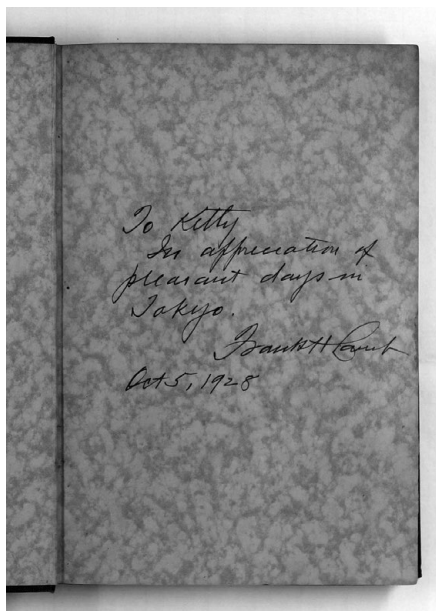


写真 Rotary へのフランク・ラムの書き込み

されたロータリークラブ第2回太平洋地域大会の翌日である。この大会は、海外からの参加者109名、国内の参加者459名という大規模なもので、北島が執筆した「英文歴史」(*History of the Rotary Club of Tokyo*)にも、その様子が詳述されている。書籍への書き込みからは、大会に出席したラムが北島に直接贈ったものが、現在図書館に収蔵されているのだとわかる。そして、本書の存在は、図書館の貴重コレクション「北島亘寄贈書」が、「ユニテリアン・ミッションの教師、日本銀行員を経て、大正期以降は東京株式取引所取引員になった」北島亘の旧蔵書だという、『大倉山論集』第61輯までの当研究所による推測が正しかったことを証明する。

「北島亘寄贈書」には、このフランク・ラム *Rotary: A Business Man's Interpretation* (エ-6-15) のように、北島が帰国した明治29年(1896)以降に刊行された書籍が、洋書・和書ともに含まれている。全冊の刊記と書き込みの有無を確認したことで、「北島亘寄贈書」が、従来想定していた「北島が神学校時代に使用した書籍群」に加え、北島が帰国後に入手した書籍も含んだ書籍群であることが明らかになったのである。

ラムの *Rotary* と同じく1927年(昭和2)の刊記を持つ和書の1冊、恩田空『日暮硯』(エ-6-68)を編集・発行した土屋元作も、大阪ロータリークラブの会員である。昭和2年(1927)当時の北島は、東京ロータリークラブの幹事を務めている。刊行から何年も経った後に読んだ可能性もあるが、この頃の北島にとって、ロータリークラブが重要な位置を占めていたことが窺える。

書籍への書き込みは、北島の読書歴や行動を知る手がかりになる。例えば、いくつかの書籍には、北島の名前・日付とともに都市名が記されている。洗礼や結婚式に臨む聖職者の携帯の便を考慮して作られた小型の書籍であるマイノット・ジャドソン・サヴェージ *Ministers' Hand-Book: For Christenings, Weddings, and Funerals* (エ-6-12) には1895年2月の日付と、“Watari Kitashima”という名前、“Vineland”という地名が書き込

まれている。これは、ニュージャージー州ヴァインランドを示している。また、*Scripture Proofs and Scriptural Illustrations of Unitarianism* (エ-6-13) の“Cambridge Mass”という書き込みは、マサチューセッツ州ケンブリッジを示すものである。そして、1894年11月2日付の“W Kitashima Nov. 2' 94 Northampton Mass”という書き込みが、先述したサヴェージの著書 *Life Questions* (エ-6-1) の他、優生学・骨相学の権威オーソン・スクワイア・ファウラーの *Hereditary Descent* (エ-6-5)、マーティン・タッパーの詩集 *Hactenus* (エ-6-55) の計3冊にある。異なる話題を扱っているように見える3冊だが、実は、北島が同じ日にマサチューセッツ州ノーサンプトンで手に取ったという共通性を有しているのである。

このように、書籍への書き込みに着目すると、蔵書群の形成過程や書籍の入手ルートが浮かび上がってくる。調査の結果、北島がアメリカで入手した書籍についても、従来のように「北島が神学校時代に使用した書籍群」と一括するより、細かい区分が可能になった。例えば、書店で（おそらく北島が）購入した本、他者が北島に贈った本、北島以前に他者が使っていた本、アメリカの図書館の蔵書だった本など様々な区分が可能であるし、それぞれの書籍の属性も1つだけとは限らない。

北島が神学校時代に使用した書籍の一例として、先述した“Cambridge Mass”という地名が書き込まれているジョン・ウィルソン *Scripture Proofs and Scriptural Illustrations of Unitarianism* (エ-6-13) を取り上げよう。同書は、表題からわかるようにユニテリアン主義に関する書籍である。表紙を開くと、見返しの右側には、“Watari Kitashima with best writer of J. E. Homans Cambridge Mass Oct 9 th 1888.”という書き込みがあり、左側には“Theological School in Harvard University”のシールが貼られている。そして、標題紙には、“DIVINITY SCHOOL HARVARD UNIVERSITY LIBRARY”という蔵書印が捺されている。これらから、北島がハーヴァード大学の神学校で学んでいた時に読んだものと推察で

きる。

次に、北島への寄贈者がわかる書籍について、先述した *Rotary* (エ-6-15) 以外の例を紹介しよう。*A Memorial of Samuel Foster McCleary, Jr., Associate Pastor of the Church of the Savior, Brooklyn, N.Y., 1892.* (エ-6-48) には、“Rev. Watari Kitashima with the regards of Sam. F. McCleary”という書き込みがあり、日付の判読は難しいが“1893”という年代は読み取れる。また、日本女子大学校の創設者成瀬仁蔵がプロテスタントの牧師ポール・サワヤマについて記した *A Modern Paul in Japan* (エ-6-40) には、“Rev. W. Kitashima Ph.D. with the compliments of the author. Cambridge, Mass. Sep. 23: 1893”という謹呈本であることを示す書き込みがある。これら以外の書籍にも、北島以外の人物による書き込みが、抹消されているものも含めて散見する。本稿では、北島を中心に論述を進めてきたが、「北島亘寄贈書」が、北島と関わりを持った人物についての新たな情報を与えてくれる可能性も指摘したい。

おわりに

以上、北島亘および「北島亘寄贈書」についての調査成果を述べてきた。紙幅の都合もあり、本稿では、書籍の内容を詳しく紹介できなかったが、時間をかけて読み進めたいと思わせる書籍ばかりである。

また、大倉精神文化研究所附属図書館は、「北島亘寄贈書」以外にも、戦前の洋書や和文のユニテリアン関係書籍⁽³⁰⁾を収蔵している。「北島亘寄贈書」の書籍を読み進めていくのも、「北島亘寄贈書」の一冊の次に、これらの書籍を読んでいくのも楽しいと思う。ぜひ、図書館に足を運び、実際に書籍をご覧になっていただきたい。

【附記】

北島亘の略歴に関して内田和秀氏・峯岸英雄氏・伴野文亮氏・古畑侑亮氏、シカ

ゴ万国宗教会議関係の参考文献について芹口真結子氏に御教示・御協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 図書館ウェブサイト (<http://www.okuraken.or.jp/tosyokan/>)、平井誠二「展示会「図書館の貴重コレクション展」」(『大倉山論集』第61輯、2015年)。
- (2) 前掲注(1) 平井「展示会「図書館の貴重コレクション展」」。なお、これまで当研究所では、昭和6年(1931)当時の資料(沿革史資料No.5886「外国宛書信控」所収の「北島亘氏寄贈図書目録」)に基づき全71冊と紹介してきた。しかし、実際に書籍が寄贈された昭和7年(1932)に図書館が登録した冊数、および現在所蔵している冊数は70冊である。よって、本稿では、全70冊として論を進める。なお、「北島亘氏寄贈図書目録」に記載されているが現在所蔵していない書籍は、キャサリン・マライア・セジウィック *Home* の新版である。同書の旧版は「北島亘寄贈書」の中の1冊として現存しており、「北島亘氏寄贈図書目録」にも記載されている。著者セジウィックは、アメリカの「家庭小説」の嚆矢『ニューイングランド物語』の著者として知られるユニテリアンである。
- (3) 前掲注(1) 平井「展示会「図書館の貴重コレクション展」」。
- (4) ユニテリアンは、三位一体(三位とは、父〔神〕・子〔キリスト〕・聖霊のこと)、キリストの神性、原罪についての教義を退け、神だけの神性を主張するキリスト教の一派である。アメリカでは、会衆派教会の中で、ハーヴァード大学神学部を中心として発展した。日本では、明治初年に文部省が刊行したチェンバース『百科全書』、明治19年(1886)と翌20年(1887)に矢野文雄が『郵便報知新聞』に寄稿した文章の中で紹介されており、明治20年にはアメリカのユニテリアン協会からアーサー・メイ・ナップ牧師が派遣される(『世界宗教大事典』[平凡社、1991年]、『日本キリスト教歴史大事典』[教文館、1988年]など参照)。
- (5) 北島メリー・エミ「父 北島亘とロータリー」(『ロータリーの友』第11巻第4号、1963年)。
- (6) 土屋博政「講演 日本のユニテリアンの盛衰の歴史を語る(於:2005年4月1日同志社大学人文科学研究所)」(『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』47、2005年)。
- (7) 田畑則重『日露戦争に投資した男』(新潮社[新潮新書]、2006年)。同書には、Jacob H. Schiff, *Our Journey to Japan*(NY: The New York Co-operative

Society, 1906) が訳出されており、本稿での引用は、同書の田畑氏による和訳によっている。

- (8) 前掲注(6) 土屋「講演 日本のユニテリアンの盛衰の歴史を語る」。
- (9) 「北島巨氏略歴」(前掲注(5)『ロータリーの友』第11巻第4号所収)。
- (10) 磯邊弥一郎『国民英学会創立第三十周年回想録』(国民英学会出版局、1918年)。
- (11) なお、北島と同時期、ペンシルヴェニア州ミードヴィルには新渡戸稲造も留学していた。新渡戸は、ミードヴィルについて、「この地は風色に富み、閑静にして住居に心地よき土地」であると述べている。また、1884年10月に渡米した新渡戸が、アメリカで最初に入学した大学はアレゲニー大学である。同校に入学した理由は、新渡戸が洗礼を受けたハリス牧師の夫人の住居がミードヴィルにあり、夫人が学校長に紹介したためだという。新渡戸は、同校の学生について、「この学生もまた、思いやりの深い、幸福そうな連中です」と述べている(新渡戸稲造著・鳥居清治訳注『新渡戸稲造の手紙』〔北海道大学図書刊行会、1976年〕参照)。
- (12) 国民英学会は、明治21年(1888)2月に、アメリカ出身の英語学者イーストレーキ(F. W. Eastlake)が教頭、磯邊弥一郎が幹事となり、神田錦町に設立された英語学校である。明治23年(1890)に、イーストレーキが脱退して日本英学院を創設した後は、磯邊が経営の中心を担う。なお、国民英学会の閉校は、第二次世界大戦の頃だという(日本の英学一〇〇年編集部編『日本の英学一〇〇年 明治編』〔研究社出版株式会社、1968年〕)。
- (13) 前掲注(10) 磯邊『国民英学会創立第三十周年回想録』。磯邊弥一郎は、北島について同書で、「米国に於てユニテリアンの牧師として一教会を監牧し、米国人に伝道したるほどなれば其英語の自由自在なること推して知るべし」と述べている。
- (14) 浦和男「明治後期における西洋笑話と英語学習書」(『文学部紀要』第22-2号、文教大学、2009年)には、「詳しい経歴がわからないが、高等教育機関での英語の職には就いていないらしい。明治30年秋から日本銀行に勤務し、同じ頃入行した馬場孤蝶と懇意にした」と記されている。
- (15) 前掲注(7) 田畑『日露戦争に投資した男』。
- (16) 同前。
- (17) 前掲注(10) 磯邊『国民英学会創立第三十周年回想録』によると、リリアンは、「時々自宅に会話専修科の生徒を招」いて「茶話会を開き、英語実習の機会を与え」ていたという。
- (18) 国立国会図書館所蔵。前掲注(9)「北島巨氏略歴」には「1896年、リリアン・

ブラウンと結婚した」、新日本証券総務部社史班編『山叶証券史』(新日本証券、1979年)には「ニューヨークに駐在していた時代に米国婦人と結婚」したと記されている。

- (19) 前掲注 (18) 『山叶証券史』。
- (20) 東京株式取引所編輯・発行『東京株式取引所五十年史』(1928年)。
- (21) 前掲注 (20) 『東京株式取引所五十年史』、大正5年12月23日付『中外商業新報』など。
- (22) 前掲注 (20) 『東京株式取引所五十年史』。
- (23) 商工社編集・発行『日本商工人名録』(第八版、1921年)。なお、石井寛治「再考：戦前期日本の直接金融と間接金融」(『金融研究』第31巻第1号、2012年)にも北島の名前が見える。
- (24) 北島亘編集・発行 *History of the Rotary Club of Tokyo Part 1～6* (東京ロータリークラブ、1936～1941年)。なお、大倉邦彦も1923年9月に東京ロータリークラブの会員となっている。*History of the Rotary Club of Tokyo* には、邦彦の著書『感想』や、邦彦の海外視察、大倉精神文化研究所附属図書館建設に関する記事も見られる。北島の旧蔵書が当研究所に寄贈された背景を考える上で、北島亘と大倉邦彦の東京ロータリークラブにおける交流は注目されよう。
- (25) 図書館OPACのアドレスは、<https://sv2.opac.jp/paop/cgi-bin/index.cgi?LibId=013v2d8>。
- (26) 森孝一「シカゴ万国宗教会議：1893年」(『同志社アメリカ研究』26、1990年)。
- (27) 中西直樹「明治期における九州真宗の一断面」(『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』21、2010年)、嵩満也「シカゴ万国宗教会議と明治初期の日本仏教界」(『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』13、2011年) など。
- (28) 中西牛郎の履歴については、星野靖二「中西牛郎の宗教論」(星野『近代日本の宗教概念』[有志舎、2012年]、初出2002年)、平井金三の履歴については、吉永進一・野崎晃市「平井金三と日本のユニテリアニズム」(『舞鶴工業高等専門学校紀要』40、2005年) 参照。
- (29) 前掲注 (4) 『日本キリスト教歴史大事典』、前掲注 (12) 『日本の英学一〇〇年 明治編』など参照。
- (30) 佐治實然演説『宗教演説筆記』(日本ゆにてりあん協會、1895年)、日本ユニテリアン弘道會編『進歩的宗教 自由基督教徒大會講演集』(日本ユニテリアン弘道會、1911年) など。

表2 「北島巨寄贈書」への書き込み(抄)

番号	著者	書名	出版社	刊行年	書き込みの内容
1	M. J. Savage	<i>Life Questions</i>	Lockwood, Brooks [Boston]	1879	W Kitashima Northampton Mass Nov. 2 '94.
2	J. H. Smithon	<i>Letters on the Theology of the New Church Signified by the New Jerusalem</i>	Swedenborg Publishing Associa- tion [Philadelphia]	1882	Watari Kitashima Apr. '91
4	B. F. Barrett	<i>The Question: "What are the Doctrines of the New Church?"</i>	The Swedenborg Publishing Associa- tion [Germantown, Philadelphia]	1883	Watari Kitashima Apr. '91
5	O. S. Fowler	<i>Hereditary Descent</i>	Fowlers and Wells [New York]	1847	W Kitashima Nov. 2 '94 Northampton Mass
6	Washington Gladden	<i>Who wrote the Bible?</i>	Houghton, Mifflin [Boston and New York]	1894	W Kitashima April '94.
7	C. R. Barnes	<i>Hand-Book of Bible Biography</i>	Phillips & Hunt [New York]	1884	My dear brother Mr. Kitashima from W. Kitashi- ma...
12	M. J. Savage	<i>Ministers' Hand-Book: For Christenings, Weddings, and Funerals (3rd Edition)</i>	George H. Ellis [Boston]	1889	WatariKitashima / Vineland / Feb. '95
13	John Wilson	<i>Scripture Proofs and Scriptural Illustra- tions of Unitarianism</i>	James Munroe [Boston]	1846	Watari Kitashima with best writer of J. E. Homans Cambridge Mass Oct 9th 1888.
15	Frank H. Lamb	<i>Rotary: A Business Man's Interpretation</i>	The Rotary Club of Hoquiam [Hoquiam, Washington]	1927	To Kitty In appreciation of pleasant days in Tokyo. Frank H Lamb Oct 5, 1928
16	John Henry Barrows	<i>The World's Parlia- ment of Religions Volume I</i>	The Parliament Publishing Company [Chicago]	1893	Watari Kitashima Jan. 94.
17	Henry George Liddell&Robert Scott	<i>Greek-English Lexicon</i>	Harper&Brothers [New York]	1867	Will B. Keys.../ Hamilton... (以上、ペン書き) / Watari Kitashima (2ヶ所鉛筆書き)
18	Myron Adams	<i>Creation of the Bible</i>	Houghton, Mifflin [Boston and New York]	1892	W. Kitashima Feb. '94. Athol GQGS
20	Thomas Henry Huxley	<i>Lay Sermons, Addresses, and Reviews</i>	D. Appleton [New York]	1871	W Kitashima / R. E. Rogers 1871
22	Henr. Tittman- num & Augustus Hahn	<i>Novum Testamentum Graece</i>	Sumtibus et Typis Leavitt [New York]	1842	H. K. Morrison To J. E. Wheeler/Watari Kitashima
25	Richard G. Moulton	<i>St. Luke and St. Paul</i>	The Macmillian [New York]	1900	J L Marsh
31	James Mar- tineau	<i>Home Prayers</i>	Longmans, Green [London and New York]	1891	Watari Kitashima April '92

32	Augusta Cooper Bristol	<i>Poems</i>	Adams [Boston]	1868	Appreciating by Yours A. C. B.
33	The Duke of Somerset	<i>Christian Theology and Modern Skepti- cism</i>	D. Appleton [New York]	1872	Watari Kitashima Feb. 29. '92 / E.F.N.E. Frank W. Hutt, Gloucester, Mass (抹消)
34	Miss Sedgwick	<i>Home (New Edition)</i>	Thomas R. Knox [New York]	不詳	※シールにW. Kitashimaと記 名あり
36	Joseph Henry Allen	<i>Positive Religion</i>	Roberts Brothers [Boston]	1891	W. Kitashima Dec '92
40	Jinzo Naruse	<i>A Modern Paul in Japan</i>	Congregational Sunday-School and Publishing Society [Boston and Chicago]	1893	Rev. W. Kitashima Ph.D. with the compliments of the Author. Cambridge, Mass. Sep. 23: 1893.
43	J. M. Fuller	<i>The Four Gospels</i>	Society for Promoting Christian Knowl- edge [London]	1890	Watari Kitashima Dec 1890
45	James Freeman Clarke	<i>Self-Culture</i>	Houghton, Mifflin [Boston and New York]	1893	※シールにW. Kitashimaと記 名あり
46	W. P. Tilden	<i>The Work of the Ministry Lectures: Given to the Meadville Theological School, June, 1889</i>	Geo. H. Ellis [Boston]	1890	Watari Kitashima May '90
48		<i>A Memorial of Samuel Foster McCleary, Jr. Associate Pastor of the Church of the Savior, Brooklyn, N.Y., 1892.</i>	University Press [Cambridge]	1892?	Rev. Watari Kitashima with the regards of Sam. F. McCleary... 20 1893
50	T. W. Rhys Davids	<i>Lectures on the Origin and Growth of Religion as Illustrated by Some Points in the History of Indian Buddhism</i>	Williams and Norgate [London and Edinburgh]	1881	Warari Kitashima Feb '94
51	George Dawson	<i>Prayers with a Discourse on Prayer(11th Edition)</i>	Kegan Paul, Trench, Trübner [London]	1892	Watari Kitashima Feb '94 Athol GQGS
55	Martin F. Tupper	<i>Hactenus</i>	Charles H. Peirce [Boston]	1848	W Kitashima Nov. 2 '94 Northampton Mass
56	Thomas à Kempis	<i>Of the Imitation of Christ</i>	Walter Scott [London]	不詳	Watari Kitashima Jan '93
60	John Coleman Adams	<i>An Honorable Youth</i>	Universalist Publishing House [Boston]	1906	J. W. Cate.

番号は、エ6-■■■を示す。複数の書き込みは / を用いて表記し、一部は三点リーダーで省略した。

※印は、“GIVEN TO Rev.

BY THE TRUSTEES OF THE MEADVILLE THEOLOGICAL
SCHOOL. FROM INCOME OF THE BROOKES FUND FOR LIBERAL CHRISTIANITY.”シール添付。